なる傾向があり，両者が中間形で連絡するといったものではないようである。中部地方では大体日本海側にヨツバシオガマが，より南にクチバシシヨツバシオガマが分布する傾向がある。しかし，八ヶ岳や北岳にもヨツバシオガマが見られるから地域ではっきり異なるわけでもない。このことは八ヶ岳にウルップソウがあり，北岳にキンロバイがあることなどと類似した最新氷河期に関係する現象かもしれない。

(東京大学理学部付属植物園)

○タイワンマツタケについて（小林義雄） Yosio KOBAYASI: On *Tricholoma formosana* Sawada

本年（1982）秋に日台合同で台湾菌類調査を行うについて，その打ち合わせのため4月に台湾へ赴いた。その際に台湾大学植物系の陳瑞青教授と談偶々タイワンマツタケのことに及び，数年前に玉山（新高山）の八通関で採ったタイワンマツタケの液浸標本を恵与された。帰国早々これを鏡検した結果，新しい事実が見出されたのでここに記すことにした。

同蕈は沢田兼吉氏が台湾菌類調査報告の5報（1931）に図入りで発表した。採集地は八通関のニイタカアカマツ林である。日本のマツタケに比べて氏が挙げた著しい相異点は担子基に普通は2本の担子梗があること（稀に4本），胞子に油球が多く，担子器は長形（40-50 μ），傘の表面の鱗片は一層軟質で淡色である点である。

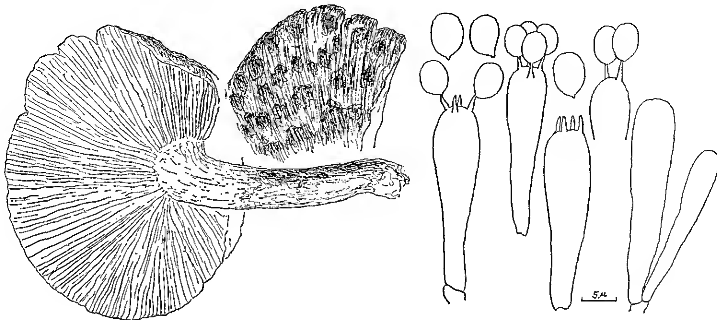


図 1. タイワンマツタケの子実休（×1/3）及び担子器と胞子.

さて，私が液浸標本で観察した結果，傘表の鱗片，担子器の長さ（30-35 μ），胞子（6-7×5 μ）などに差異は認められなかった。日本産のマツタケでも採りたては淡色である。また担子梗は大部分4本で，僅に2本のものも見出せる程度であった。よってこの標本で観察した限りでは台湾産を変種として区別する必要はないと思われた。しかし正確を期するためには，日本産のものにつき2本の梗を有するものが混って居らぬかをしらべ，台湾産の生品について委しい生態と形態的研究を進める必要がある。

(国立科学博物館)